

カル夢ヲコソ見侍ツレト談給ケレバ、少將打睨テマサシキ御夢ニコソ侍ルナレト答給テ翌日
剃頭云々、

〔權記〕寛弘八年七月十二日癸未夏末夢天大雪時甚寒其雪自天降滿于板文債思之自天降遭天皇
御晏駕也滿于堂上足踏者躬自行此夜之事也俗以夏雪之夢爲穢徵也或者又夢檢非遣使多降自
天立床子於鳥戶野共坐之卜山陵云々于時院御惱之間也一條當于崩御爲夢徵而依擇吉方不卜此地
後冷泉院上皇自九月朔不豫十月廿四日遂崩來月十六日可有御葬其處可在此野云々其夢相有
亦說又雖不可信松乘有驗又謂凡夫之通信哉

〔大鏡七〕

太政大臣道長男君は略中今一所は馬頭にて顯信とておはしき御わらはなこれ君なり長

和元年壬子正月十九日入道し給ひてこの十餘年佛のごとくしてをこなはせ給ふいと思ひか
けずあはれなる御事なり略中高松殿源明子顯信母の御夢に左のかたの御ぐしうしろをなか
らよりそりおとさせ給ふと御らんじけるをかくて後にぞこれが見ゆるなりけりとおもひさ
だめてちがへさせいのりなどをすべかりけるをとおほせられける

〔春記〕長久元年九月廿四日丙子仰云保家朝臣今日參上先日下遣伊勢今日參上内裏燒亡夜齋王夢云諸卿群
集帷下皇后宮大夫云御藥事無殊事定平御歎但内裏可有火事者其夢相叶事太可希有也者父子
間有_レ其告歎可_レ悲々々

〔保元物語〕新院被召爲義事附鶴丸事

六條判官爲義略中餘ニ白河殿ヨリ度々被召ケレバ可參由申ナガラ未參依季長卿六條堀河家
ニ行向テ院宣ノ趣ヲ宣ケレバ忽ニ變改シテ申ケルハ略中都テ今度ノ大將軍痛存スル子細多
ク侍ツ聊宿願ノ事有テ八幡ニ參籠仕テ候ニサトシ侍キ又過ル夜ノ夢ニ重代相傳仕テ候月數
日數源太ガ産衣八龍澤瀉薄金楯無膝丸ト申テ八領ノ鎧候ガ辻風ニ吹レテ四方へ散ト見テ侍